




エッチな
アクションが
盛りだくさん

セックスパークへようこそ!





暖かい風とともに甘ったるい匂いが鼻をつく。

入口を抜けた先には異様な光景が繰り広げられていた。

老若男女が周囲の目を憚らずセックスに興じている。

他人の性行為など目の当たりにした経験がない俺は

動揺すると共に感動を覚えた。



「あなた…… やっぱ行くの？」

「大丈夫だよ、あずさ。何も乱交しようってんじゃないんだから」

「でも、裸見られるの恥ずかしい……」

「風呂みたいなものだよ。皆裸だから気にすることはないよ」

「でも……」

「良いから行こう」



「セックスパーク」は大人向けアミューズメントパークだ。

その名の通り、セックスを売りにした施設やサービスが整っている。俺たちのような夫婦や恋人同士のカップル以外にも

楽しめるようにキャストと呼ばれる店員が単独で来た男の相手をしてくれるらしい。

男のみの場合は5万から10万だったか……

加えて性病検査の費用も掛かるので結構な額だと思う。

それでもネットでは好評な様子で、

その値段に見合うだけの価値があるという意見が大半だった。

男のみと比べてカップル価格はふたたび1万円と非常にリーズナブルだ。

おまけに性病検査の費用もパーク側が負担と至れり尽くせりである。



カップルだとかサービスプランだとかはリストバンドの色や内臓されているICカードで判別しているようだ。

「ん？ あずさ、バンド付けないのか？」

「ええ、ちよつと痛いから…… 締め付けキツすぎませんか？」

「そうかもね。でも失くすと大変みたいだから……」

俺が付けておくよ」

「はい。お願いします」





「絶対にリストバンドをはずさないでください」という文を
パンフレットや入口で見た。

ICカードの出金そのままクレジットカードに
請求されるらしいので落としたら大変だ。

俺はあずさの分のリストバンドも左手首に付けた。



あずさの手を取り先を進む。

床は硬目のビニールマットだが

あちこちローションで濡れているため歩きにくい。

あずさも歩きにくそうに肩を揺らしている。



男たちがあずさの揺れるおっぱいに目を見張る。

普段なら胸の谷間を見られるだけで

怒り心頭になるのだが今は心地良いくらいだ。

傍らの女を放ってあずさに目を盗まれる様子は

見ていると誇らしい気持ちになる。

俺の妻は美人だろう、と優越感に浸った。





「あずさは何かやってみたい物ある？」

「い、いえ…… どれも刺激が強すぎてまともに見れません……」

「ははは、まずはアレやってみようよ。」

「ウォーターライダーみたいだよ。」

「あつ、良いですね。普通っぽいです。」

一見何の変哲もないウォータースライダーのようだが
スライダーの周囲から噴き出している水の中には
ローションが含まれているらしい。
傾斜も緩やかで滑りながらセックスを楽しめるとい
うアトラクションだそうだ。



「ちょっと待っててくださいね！」

ウォータースライダーのスタート台にキャストらしき一人の女の子がいた。
あどけない表情からは幼さを感じさせたが

可愛らしい顔立ちでスタイルも良い。

あずさとは違ったタイプの魅力的な子だ。

陰毛を剃ってるのか剥き出しの性器に思わず目が行ってしまふ。

あずさが俺の腕を肘でつつく。

「……あんまり他の女の子を見ないでください」

「う、うん……」

意識的に女の子から目を離そうとするが

どうしても白い肌をチラチラ盗み見てしまう。

キャストの女の子は誰を抱いても良いと聞く。

それも全員、生でセックスしても良いとか。

俺も声を掛ければこの子と生でセックスできるのだ。

女の子の抱き心地を想像して下腹部が熱くなる。



「はい！ そろそろ良いですよ。」

無茶な格好ですると危ないから気を付けてくださいね！

「あ、あの…… コンドームのサービスがあるって聞いたんですけど」

「ありますよ！ 私が付けてあげましょうか？」

そう言うとキャストの子はトレイからコンドームをひとつ取り出して
手際よく封を切った。
ピンク色のコンドームを持ったまま俺の目をジッと見つめてくる。



「えっ、それは……」
それはつまり、彼女の指が俺のアソコに触れるというわけで……
戸惑っている俺を尻目にあずさが女の子からコンドームを受け取った。

「私が付けます」

「あ、はい…… お願いします」
下心を見透かされたようで居心地が悪くなった。

「はい…… いいですよ」

「おー、ありがと。……じゃ、いいかな。後からしようか」



「……は？」

恥ずかしそうにあずさは言うとお尻を俺の方へ向けた。





「ちよつと怖いです……！」

「ははは。でも面白いね」

あずさと繋がった状態でウォーター 슬라이ダーを滑り落ちる。

傾斜が緩やかとはいえローションまみれの 슬라이ダーは滑りが早く、

スピード感は十分にある。

セックスしながらウォーター 슬라이ダーを滑るのは

新鮮だが想像よりも物足りない。

「やっぱりこの格好恥ずかしい……」

下から丸見え……」

「ちよつと失敗だったかな？」

もちろん丸見えなのは問題ではない。

あずさも滑る所をよく見えるようにと

寝そべった体位にしたんだが、

これだと亀頭の先しか挿入出来ない。

先っぽだけだと気持ち良さも半減するし、

すぐ抜けそうになってしまう。

もっと気持ち良くなるために

あずさの膣を下から深く突いた。

「あつ、危ないですよ……！」

「これくらい平気、平気」

あずさの太ももを押さえ付けて腰を振ることで
ようやく陰茎の中ほどまで膣の感触を得た。
ペニスを走る快楽と滑り落ちる快感で気分が高揚する。
高い場所からパークを見下ろしてセックスしながら
ウォータースライダーを滑り落ちるのは開放感があった。

ゆっさ

びり

びり

ゆっさ

あ

あ

「やつ、やあ……！！ 恥ずかしいです！」
「大丈夫だって！ 皆してるんだから」
言葉とは裏腹に膣を突くとあずさは
嬌声を上げた。
それが嬉しくて何度も腰を振る。



「あつ、あつ！」
あずさの可愛いあえぎ声を聞いて自然と腰の振りが大きくなった。
もっと気持ち良くなりたい。
もっと深くまで挿入したい。
より強い快楽を求めてスライダーから落ちない程度に腰を大きく振った。

そっ——

ウォータースライダーの終着点で



と、大きな音を立てて俺たちは離れ離れに放り出された。



「すみません！ 夫を探しますので……！」
男たちから逃れようとするも男のひとりが手首を掴んで離さない。



「あの……！ 離してください！」

「あれえ？ 奥さんバンド付けてないじゃん」

「おっ、本当だ。これじゃキャストに間違われて襲われても仕方ないな」
ニヤニヤと笑いを浮かべて男たちがあずさの体に触れた。

抵抗するあずさだったが

ヌルヌル滑るローションに足を取られ、呆気なく押し倒されてしまった。





「あ、あの……！」

私、本当にお店の人じゃないんです！

私たち夫婦で来ていて……！」

両腕と両足を押さえ付けられて
身動きが取れない。

露わになった恥部が丸見えだ。

男のペニスが今にも挿入されそうだった。

「どっちでも関係ねえよ」

「そうそう、どっちかって言うと

「ここの子よりも人妻の方が燃えるな」

「あっ！」

膣口のヒタを指で撫でられて
反射的に体がビクンと跳ね上がる。
夫以外の男が触れてはいけない場所だ。
あまつさえこの男は
セックスしようとしている。
このままではレイプされてしまう。

ヌル





「駄目です！

む、無理矢理なんて犯罪ですよ？
止めてください……！」

「だからあゝ

奥さん、バンド付けてないでしょ？

キャストと間違われたって

文句言えないよ？」

「そう言う事。それじゃ！

人妻マンコ、いただきます」

「駄目！ だめえ！」



「いやあ……！
入ってる……！」

「あの人以外のおチンチンが……！」

「へへっ。」

「旦那以外の男とすんのも悪くないだろ？」

「悪いです！」

「お願いだから抜いてください……！」

「うん、抜く抜く。」

「奥さんのマンコで一本抜いちゃう」

「いやっ！ いやあ！」

ズ
ク
ッ

拒否するあずさを
無視して男は腰を振る。
男の硬いペニスが
膣内に挿入されるのを感じる。
しかもコンドームを
付けていない生のペニスだ。
夫以外のペニスの感触に怖気を振るう。
このまま中に出されてはたまらない。

アガ

アガ

あう

あう





「やめてください！ やめて……！」

「うるさいから口ふさいじゃえよ」

「あいよ。奥さん、噛まないでね」

両腕を押さえ付けていた男は
力任せにあずさの顔をペニスへ近づけた。

はあ

はあ

ズク

ヌチャ



「ん！ んんっ……！」

口の中いっぱいにはペニスの味が広がり、匂いが鼻を突き抜ける。

男はセックスするように腰を振ってあずさの口内を犯した。

「奥さんのマンコヌルヌルじゃん。超感じてね？」

「ははは！ 本当は期待してたんでしょ？ めっちゃチョコ舐めてるし」

グハッ

グハッ

んんん！



濡れているのはローションの所為だし、
舐めているように見えるのは
喉の奥までペニスを入れられないように
舌で防いでいるだけだ。
都合良く解釈して男たちは
笑ってあずさを犯し続ける。
噛み付きでもすれば
止めてくれるかもしれないが
大事な部分を傷付けるのは気が引けた。

グッ
グッ

グッ
グッ



「出るよ、奥さん！」

俺の赤ちゃん産んでね」

「んー！ んーっ！」

見も知らぬ男の子を

妊娠させられてしまうとあずさは恐怖した。

バタバタ体を動かして

懸命に逃れようとするも

男たちの拘束が解ける事はなく、

逆に喜ばしているように見える。

グッ

グッ

ふっ！

ふっ！

「んーッ……！」
男の陰茎が膣口でピクピク脈打つ。
膣内で射精されてしまったのだ。
夫にも中で出された事はないというのに。
あずさは暗い気持ちで膣の中から
尻にドロドロした液体が流れるのを感じた。

ピクピク





「それじゃ、次は俺だな」

「駄目です！

お願いします！

止めてください……！」

必死に懇願するあずさだったが
男は聞く耳を持たない様子だった。

また犯される。

そう思った矢先に女の子の声が掛かった。



「そこまでじゃー！」
はつらつとした声と共に
ショートカットの小柄な女の子が間に割って入った。
あずさを立たたせて男たちに頭を下げる。

「ごめんなさい！」

凛たち今からあつちのアトラクションで

お仕事しなきゃいけないの！

お兄さんたちは悪いんだけど他の女の子と遊んで欲しいにゃ〜

「お、おい……」

「それじゃ！」



女の子はあずさの手を取り、脱兎の如く駆け出した。

「ここまで来れば大丈夫！」
「はあ、はあ……」

レイプされてしまったものの
犯され続けるような事態から逃れる事が
出来てあずさは安堵の息を付いた。



「あの、ありがとうございます。私ここに来るの初めてで……」

「凛も男の人苦手だったから最初は大変だったにゃ〜。お姉さん、お名前は？」

「あずさと申します」

「じゃあ、あずさちゃんだね！」

あずさちゃんも凛の事は凛ちゃんって呼んで欲しいにゃ〜

「は、はい。凛ちゃん」



「うにゃ〜。ホールキャストは大変だからもっと楽な所に連れてってあげるにゃ〜」

「え？ あ、あの、私は……」

「まずはシャワーを浴びて綺麗にするにゃ〜」

言葉を遮って凛はあずさの背中を押した。

腰から胸に掛けて女の温かい感触と心地良い重さを感じた。
柔らかな唇を俺の唇に押し付けて小さい舌が俺の舌を舐めている。
女が体を揺らすとペニスに鋭い快感が走った。

意識がだんだんハッキリしてきた。
確か俺はあずさとセックスしながら
ウオーターライダーを滑っていて……



目を開けた先にはあずさではなく、さっきのキャストの子がいた。
状況が飲み込めない。
何で俺はこの子とキスをしているんだ？
というか、この感覚はセックスしているような……





「あ、お兄さん起きた？ 良かった」

「えっと…… キミ、何してんの？」

「お兄さんが溺れてたから助けたんだよお。

危ないから気を付けてって言ったのに」

「あ…… ありがとう。で、何してんの？」

「人工呼吸をしたんだけど大丈夫そうだったからちよつとサービス！
おつきくしてたし！ えへへ」

ふけ

「いや、サービスって…… しかもこれ生じゃない？」

「そうだよ？ 気持ち良くないですか？」

「気持ち良い…… 気持ち良いけど、あずさは？」

「お連れさんなら大丈夫そうだったから放っておいたけど
その内来るんじゃないかな？」

あずさがこの場になくて良かった。

セックスしている場面なんて言い逃れできない。

「ちょっとどいてくれないかな……」

「気持ち良くない？」

「いや、気持ち良いよ。」

でも、このままだと

出ちやいそうだし……」

「中に出して良いよ。」

お兄さんの精子、私の中に出して」

「いや…… まず……」



いつあずさが来てもおかしくない状況だ。
キヤストの子とセックスしている場合なんかじゃない。
分かってはいるが気持ち良さに抗うのは難しかった。
あずさとは違う匂い、柔らかさ、締め付け具合をまだ味わいたい。
理性では駄目だと思っているのに体が言う事を聞かなかった。

「お兄さんのおチンチン、すっごく気持ち良い……」
再びキャストの子が唇を重ねてきた。
唾液の味もあずさとは違う。
新鮮な女の匂いに頭がクラクラする。

生の膣がキツく締め付けながら
ガチガチに硬くなったペニスを
強くシゴく。
我慢できるはずがない。
あともうちよつとだけ……
あともうちよつとだけと
考えていたら
射精感が高まってきた。



「で、出るよ……！」
「うん。お兄さんの精子いっぱいちょうだい」
にっこり微笑む女の子の膣内に思いつ切り射精した。





「あっ、あっ……！」
膣から精液をこぼさないように女の子は腰を押し付けて陰茎の根本まで咥え込む。初めてする女とのセックスのせいかな大量の精液を射精した。膣がビクビク動いて精液を残さず搾り取られてしまった。





「すっごい気持ち良かったよ、お兄さん！」
「あ、うん……」
セックスしている場合ではなかったと反省し、
あずさが居ないか周囲を見渡す。
……それらしき女性はいない。
浮気現場を見られていなかったのは良いが、
それはそれであずさはどこに居るかが心配になる。



「お連れさん、こっちに気付かなかったのかなあ？ あっ、それ……」

「ん？ このバンド？」

「ひよっとしてお連れさんの？ あちゃ〜」

「……どうしたの？」

「私たちキャストと一般のお客さんって

バンドを付けてるかどうかでしか見分けが付かないんだよねえ。

一応衣装もあるにはあるけど大概脱がされちゃうし」

「あずさがキャストと間違われるって？」

「いやあ、それでも話せば分かりそうなもんだが……」

「ぼわぼわしているあずさの顔が目に見えなふ。」

「無理矢理レイプされそうになったら抵抗出来るとは思えない。

「不安な気持ちが胸をよぎる。」




「大丈夫だよ！ お見さんを探しに行ったんだと思うよ？
管理センターに行けばすぐ分かるんじゃないかな」
「管理センター？ どう行ったらいいの？」
「私が案内してあげるよ！」
ちよつと待っててね。他の子にも伝えるから」
そう言ってキヤストの子は白いお尻を揺らしながら
パタパタとスライダーの方へと駆けて行った。





「凜ちゃん…… これって……？」
「セックスバイクって言うレースにゃ！
これならお相手するのも一人で済むし、
お話しなくても良いから楽なんだよ！」
「いいえ……！ 困ります！ 私はキャストじゃないですう！」
「うんうん。凜も最初の頃に乱暴された時は同じこと言ったにゃ。でも大丈夫！ 楽しくお仕事できるように先輩として凜が責任持って教えるにゃ！」
「違うんですってえ……」



あずさは乗り物のような台に四つん這いになり手足を固定されていた。シャワーを浴びて痛み止めの薬を腫に塗られた所までは良かったが、いつの間にかキャストとしてレースに参加させられていたのだ。この場から逃げ出さなくてはならない事はもちろんだが、あずさはもうひとつ悩みを抱えていた。

「男の人はおチンチンの根本にセンサーを付けるの。エッチしてセンサーを擦るとバイクが走るんだけど、これが結構楽しくって凧は「一番好きにゃ」


「あの…… 凧ちゃん？」

「さっきから、その…… アツコが変なんですけど……」

「お薬かにゃ？」

「さっき塗ったのは痛みを和らげるだけじゃなくて気持ち良くさせてくれるんだよ！」

「そんなぁ…… 困りますう……」



かゆみがムズムズと下腹部を襲う。
膣がジンジン火照っていて熱い。
お尻の穴にキュツと力を入れると
膣口から子宮の方へと熱い痺れが走った。
あずさは我慢出来ずに
腰を小刻みに動かしていたが、
不意に誰かがお尻を触った。



「きゃっ！」

「初顔だね。よろしく〜」

「凜ちゃん、よろしく！」

「うん！一緒に二位取るにや〜！」

もうレースが始まるようだった。

固定された手足を動かしてもピクともしない。



「あっ、あの！」

「私はキャストじゃなくて一般客なんです！」

「夫と一緒に来てて……！」

「その、だから、駄目なんです！」

「何その設定。……良いね！」

「設定じゃなくてえ……！」

「アマダさんは1位の常連さんにやう。」

「あずさちゃん、初出場で1位取れるかもしれないね！」

「そんな……！ あうっ！」



ズブツと音を立てて
男のペニスがあずさの膣へ挿入された。
さっきまでの不快なゆみが
嘘のように引いて快感へと
変わっていくのが分かる。
しかしだからこそあずさは困った。
夫以外の男とセックスして
気持ち良くなるなど妻として不貞も甚だしい。

はなはだ

あずさ

あずさ

あずさ



「いや……！」

『ただいまより、第5レースを開始します』

あずさの眩きはアナウンスの音声に掻き消された。

スタートの合図と共に、

男はあずさの震える尻に向けてペニスを叩き込んだ。



「さっ！」
腰から頭に激しい衝撃が走り一瞬眩暈がした。
思い切りペニスで膣を突かれたのだ。





「あっ！」
膣の奥まで突かれたと同時に台座の中心が開く。
台は加速して前方へ進んだ。

津波のような激しい快楽が膣を圧迫して抗議する余裕などない。
観客から顔を見られないよう頭を下げるのが精一杯の抵抗だった。



「はあ……！ あ……っ！」
悔しい事に膣を突かれるたびに快感が高まって行く。
狂おしい快樂のせいで声が自然と喉から溢れた。
熱い痺れが絶え間なく頭を揺さ振る。
正気を保つのがやっとだ。



『ゴールッ！ 一位は2番！ 新人のあずさちゃんです！』
ゴールラインを越えたタイミングで男は射精した。
敏感になっている膣内は
子宮口に射精された精液の量まではっきり感じ取った。



「また中出しされちゃった……」
「あずさちゃん、すごいだよ。」
「嬉しくないです……」

1位おめでとう!

ドロ……







「あずささんらしいお客さんはいないって」

「そうか…… ありがとう」

いい歳して迷子というのも変だが

あずさにはしつくりくるフレーズだった。

方向音痴でしつくり道に迷っていた妻を思い出す。

ここに来たのは失敗だった。

裸のあずさをこんな場所でひとりきりにさせるなんて
狼の群れに羊を放すようなものだ。



「元気出して！ きっと管理センターの方に行ってるんだよ！」

「そうなのかな……」

「そうだよ！ あそこは待合室もあってエッチ禁止だから安全だよ。カッパルではくれた人達をキャストもそこへ誘導するし！」

「そうか…… よし！ 行こう！」

「うん！ 行こう！ 私、穂乃果つて言うの。」

「ちよつとの間だけどよろしくね！」

「ああ、よろしく、穂乃果ちゃん」

「ああ、よろしく、穂乃果ちゃん」

元気な声のおかげで不安な気持ち少し晴れた。

セックスした関係というのも手伝って俺は穂乃果ちゃんに好感を抱いた。



「それでね！」

あっちは壁ハマりコーナーって言うて

壁にハマってる女の子を好きにして良い所なの！」

「そ、そうなんだ……」



管理センターへ向かう道すがら穂乃果ちゃんは他の案内もしてくれた。

あちこちで性的な光景が繰り広げられているので目のやり場に困る。

特に隣の穂乃果ちゃんは目の毒だ。

白い裸体は眩しく、形の良い乳房と尻が歩くたびにプルプル揺れた。

ついさつき中出しセックスした事が頭から離れない。

あずさを探さなくてはならないと思っっているのに、

また穂乃果ちゃんとセックスしたいと思っっている自分がある。



「振り返っている陰茎を穂乃果ちゃんに撫でられた。突然の快感に驚く。」

「お兄さん、何かしたいのがある？」
「えっ！ いやいや、あずさを探さなくちゃいけないし……」
「そう？ その割には元気にしてますね〜」
「うおっ！」



そんな事はないだろうとツツコミを入れる前に
穂乃果ちゃんはお尻を突き出した。

「あ、嫌だった?」

「い、嫌じゃない…… けど……」

「嫌じゃないけど?」

「ほら…… 浮気みたいで良くないなって」

「そうだね。 さっきしちゃったけどね!」

「えへへ。 じゃー お尻でしてみる?」

「お尻?」

「うん! アナルセックス!」

「お尻でするなら浮気じゃないでしょ?」



「ちょっと待ってね」

穂乃果ちゃんは膣から流れている俺の精液を指ですくうとそのままアナルに指を入れた。

ゴクリと息を飲む。

お尻でするから浮気じゃないなんて道理は通らないだろう。

しかし、俺は穂乃果ちゃんの小さなアナルから目を離せずにいた。



クチヨクチヨと卑猥な音を立てて
穂乃果ちゃんは自分のアナルをほぐしている。
俺の精液でだ。
熱い物が下腹部に込み上げてきた。



「はい！ 入れても良いよ！」

広げられた指の先に穂乃果ちゃんの直腸が見えた。
中は綺麗な色しており、とても汚らしい肛門とは思えない。

くはあ

「ちゃんと綺麗にしてあるから平気だよ！」

「う、うん…… じゃ…… せっかくだから……」

周りの皆もセックスしている。

ここではセックスするのが当たり前なんだ。

アナルセックスなら浮気でも何でもない。

そもそも店の子なんだから。



一
通
り
言
い
訳
を
並
べ
た
後、
穂
乃
果
ち
ゃ
ん
の
ア
ナ
ル
に
吸
い
寄
せ
ら
れ
る
よ
う
に
俺
は
勃
起
し
た
ペ
ニ
ス
を
ア
ナ
ル
に
押
し
付
け
た。







「ああん！」

穂乃果ちゃんの嬌声が心地良く耳に響く。

小さなアナルは

中々挿入しづらかったが

龟头が入ると一気に

陰茎の根元まで

穂乃果ちゃんの中へ

入って行った。

入り口がかなりキツイ……

いや、出口なのか？

ともかく陰茎が

ちぎれそうになるくらい

穂乃果ちゃんのアナルは

締め付けが強かった。



「お兄さん、どう？ 私のアナル気持ち良い？」

「ああ……！ すっごく気持ち良い！

こんなの初めてだよ」

「良かったー！ あんっ！」

キツイアナルはまるで万力のように

陰茎を締め付ける。

ゴリゴリ陰茎を締め上げて

精液を搾り取ろうとしているみたいだった。

数回出し入れするだけで射精してしまいそうだ。



「あん！」
すぐに果ててしまうのは惜しい。
もう少し穂乃果ちゃんの
アナルを楽しみたいと思い、
動くのを止めて尻の肉を鷲掴む。
あずさほどのポリユームはないが
良い形で柔らかい尻は
触っていて気持ちが良い。
グニグニと柔らかい感触を
思う様楽しむ。



「はあ、はあ……」

お兄さんのおチンチン
すっごく気持ち良いよう……」

「穂乃果ちゃんのアナルもすっごく気持ち良いよ。
ずっと入れてたいくらい」

「えへへ。」

それじゃこのままあずささん探しに行こっか？」
「それは流石に……」



穂乃果ちゃんと繋がったまま歩き回る
シユールな姿を想像する。
セックスパークの中では
それもおかしくないかもしれないが、
アナルセックスしている状態で
あずさと出くわしたら修羅場は免れない。
まだまだ穂乃果ちゃんの
直腸の中を楽しみたい。
悪戯心に尻を軽く叩いてみる。



あう♡

「あうっ！ な、何かな？」

「あ、ごめん。」

穂乃果ちゃんのお尻を

もっと楽しみたいなああって……」

「ふふっ、良いよ。」

お兄さんの好きにして」

「そ、そうっ。」



「あん！ あんっ！」
尻を叩くと乾いた音と共に
穂乃果ちゃんは
可愛い声を辺りに響かせた。
楽器の様な……
いや、何をしてても楽しい
玩具のような穂乃果ちゃんの
体をいつまでもいじり回したい。
出来るだけ刺激を
与えないようにしていたが、
挿入しているだけで
ペニスにまわり付く
直腸のうねりに
耐えられなくなってきた。



「出るよ！ 穂乃果ちゃん！」

「良いよ！」

お兄ちゃんの精子、

私のお腹の中に出して！」



「あっ、あっ！ 出てるう！
お兄さんのおチンポ汁
ピュッピュッしてるう！」

「はあ、はあ……！ あっ！」
硬度を失ったペニスは
穂乃果ちゃんのアナルから
勢い良くはじき出された。

はー♡

はー♡





「ここならジツとしてるだけで良いから楽だよ！
誰も来ない時は退屈だけど」
「だから私はキャストじゃないんですってばあ〜……」
「だめだよ、あずさちゃん！
最初は辛いと思うけど慣れれば楽しくなってくるから！
頑張るにや〜」
「うう……」



セックスバイクが終わった後、逃げ出そうとしたあずさだったが
凜を振り切る事が出来ず、結局壁ハマリコーナーへ連れられてしまった。
透明なアクリル板は頑丈で
腰と腕を固定されてしまった状態からでは身動きが取れない。
後からはアソコもお尻の穴も丸見えだ。
通行人がいる中、恥部を丸出しにしていなければならぬ分
さつきよりも性質が悪いかもしれない。



「ん……」
痛み止めの薬のせいで膣の疼きがひどい。
アソコを中心に下腹部が熱く火照って我慢出来ないくらい
ムズムズが膣を這っている。
2度目だからかさつきより効いているようだ。
こんなに辛いなら早くセックスしたい……
一瞬頭によぎった言葉を掻き消すようにあずさは慌てて頭を振った。



「あっ！」

不意に背後から腰を掴まれた。
膣口に龟头があてがわれ
硬い感触が背筋を走る。

「だめッ！ 私は……！」



「うぐっ……！」

突如膣内にペニスを挿入された。

顔も見えない相手にいきなり犯されたのだ。

誰の物だか分からないペニスが

膣内を乱暴に掻き乱す。

また夫以外の男に犯されてしまった。

それだと言うのにあずさは

膣の疼きが消えた事で安堵さえしていた。



「んあっ！ あうう……！」
腰を突かれて子宮まで
快樂がのたうち回っている。
あずさの艶やかな声を
呼び水に男たちが群がって来た。

あ

あう

アッ
アッ

アッ
アッ

アッ
アッ

アッ
アッ



「いやあ…… んふっ！」
前に後ろに、男たちは女の口を、
膣を好き勝手に犯す。
あずさも頭を押さえ付けられて
無理矢理フェラチオをさせられた。
動かない事がせめてもの抵抗だった。

そんな中、
視界の端に見覚えのある姿を見つけた。



夫だ。

ウォータースライダーで見かけた
キャストの子と一緒に
こちらへ向かってくる。
最愛の夫との再会に嬉しさが
込み上がるものの、すぐに意気消沈した。

夫に夫以外の男性と
セックスしている所を
見せる訳にはいかない。
不可抗力とは言え、
とてもじゃないが夫と合せる顔がない。
今、夫に気付かれるのは
お互いにとって不幸な事だと
あずさは思った。

「全然やる気ねえなあ、お前」
フェラチオさせていた男は
不満そうにあずさの口内から
ペニスを抜いた。
夫の姿がよく見える。
このままでは
夫に気付かれてしまうだろう。

「ごめんなさい！
一生懸命やりますから、
も、もう一度やらせてください！」
「何だよ、急に。
真面目にやんなきゃすぐ他行くからな」
「は、はい……！」
何としても夫に気付かれてはならない。
不本意だが男の体で
顔を隠すしかなかった。



「んん！ んんん！」

男が退くと夫に醜態をさらしてしまおう。
そしたら夫に嫌われてしまうかもしれない。
そう思ったあずさは男が自分から
興味を無くさないようにと必死にペニスをしゃぶった。

あまりフェラチオをした事はないが
見よう見真似でペニスに食らい付く。
不快な匂いや味なんて気にしてはいられない。
亀頭に舌を絡ませ陰茎に唇を這わせて無我夢中で吸い込んだ。



後ろから突いてくる男のペニスの感触が
すっかり膣に馴染んでしまっていた。
ペニスが膣に触れているだけで甘く痺れ、
膣奥まで挿入されると子宮から頭まで激しい快感が衝撃のように響く。
足腰はガクガクに震えて意識が飛びそうだった。
ふわふわした心地の中で懸命にペニスを舐め回す。





後ろから一際大きく突き上げられた。
ハンマーで殴られたような衝撃が
頭を揺さぶる。
男は膣奥で射精した。
ドクドクと子宮口に熱い精液を
注がれたのが分かる。

もう限界だった。
甘い痺れを感じながら
スーッと意識がとけていった。

！♡
♡

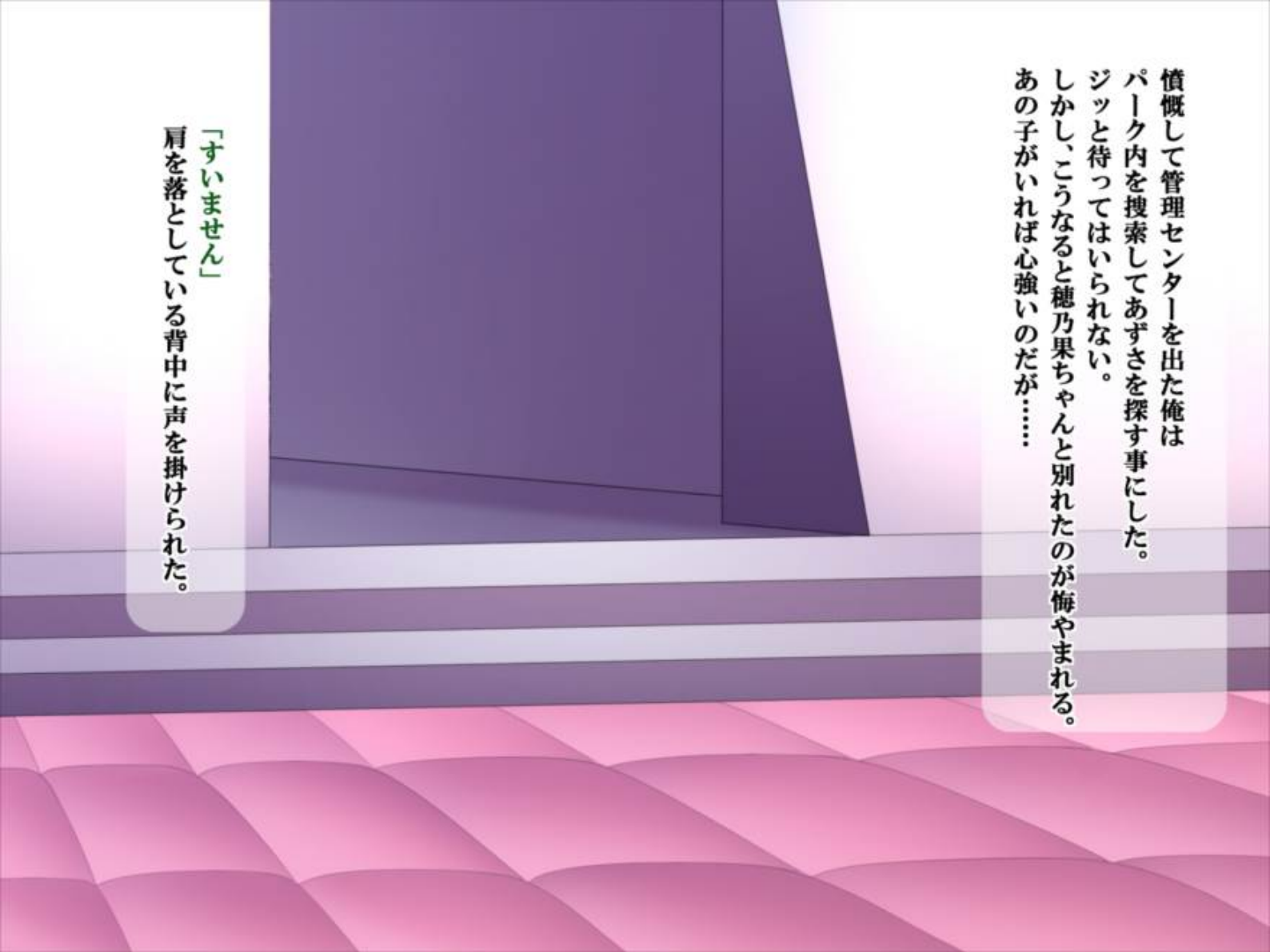


「ここが管理センターだよ！」
「お、ありがとう。穂乃果ちゃん」
「どういたしまして！」
あずささん見つかると良いね！
……最後にもう一回しちゃう？」
「うっ……」



「あはは！ 冗談、冗談！」
でもしたくなつたら声掛けてね。
お兄さんなら大歓迎だから！」
そう言って穂乃果ちゃんは俺にキスをすると元気に駆け出した。
振り向きながら手を振って走る穂乃果ちゃんに手を上げて見送った。
正直、少し寂しい。

管理センターの中にあずさはいなかった。
係員にはアナウンスするが期待しないで欲しいと言われた。
カップルで入場しておいてそれぞれ別行動する事は珍しくないらしい。
他の男に抱かれるためにあずさがわざとはぐれたのではないかと
言う腹立たしい勘繰りまでされる始末だ。
こんな所は当てに出来ない。



憤慨して管理センターを出た俺は
パーク内を搜索してあずさを探す事にした。
ジッと待つてはられない。
しかし、こうなると穂乃果ちゃんと別れたのが悔やまれる。
あの子がいれば心強いのだが……

「すみません」
肩を落としている背中に声を掛けられた。

「先程の話を聞いてしまったんですが……
これから奥さんを探しに行くつもりなんですか？」
「え？ あ、ああ…… そのつもりですが……」
そこにはスラリとした長身の美女が立っていた。
手首にリストバンドを付けているから一般客だろう。
綺麗な形をした乳房や下腹部の茂みにどうしても目が行ってしまふ。
それらを出るだけ見ないように注意して女性の顔を見る。



「私も彼と一緒にここに来たんですが
はぐれてしまって困っていたんです。
ひとりだと他の男の方がしつこくって……」

「ああ……
確かに貴女のような女性がいれば男は放っておかないでしょうね……」

「そうですね……」

「あ、すいません」

思わず浮ついた台詞を吐いてしまった。
あどけなさが残る顔は少女のようだった。
左右の瞳は微妙に色が違っており、見つめると不思議な気分になる。



「それで同じ境遇のあなたにお願いがあるんですが、一緒に彼を探すのを手伝って貰えませんか？もちろん、私もあなたの奥さんを探すのを手伝いますから」

「……」

この女性と違って俺はひとりの方があずさを探しやすいだろう。

女連れではあずさを見つけた時にいらぬ疑いを掛けられる心配さえある。

しかし、初めて訪れた場所でひとりきりで不安を抱えるのは心細い物だ。

同じ境遇の……

しかも美人と一緒にいられるのは願ったり叶ったりである。

「良いですよ。一緒に行きましょう」
「ありがとうございます」

女性はペコりと頭を下げて笑顔を見せた。
クールな印象だったが笑った顔は可愛い……



「楓と言います。よろしくお願ひします」

こうして俺と楓さんは

それぞれのパートナーを探しにパークを回る事にした。



「……ありがとうございます」
「いえ……」

「へへっ、お姉さん遊ぼうよ」
「すみません…… 彼氏がいますので」
「いいじゃん。ここじゃ関係ないって。」
「い、痛いです……! やめて!」
「おい、人の彼女にちよつかい出すなよ」
「んだよ、いたのかよ。チツ」

「お姉さんも好きなんだろ?」

グルッと外を一回りして分かった事は
あずさが外にいないという事と楓さんに
ちよっかいを出す輩が非常に多いという事だ。
少し目を離せば勃起した男たちが
獣のように楓さんに言い寄ってくるので俺たちは肩を寄せ合って行動した。
時にはしつこい男を追い払うためにカップルを装って
楓さんの腰に手を回したりしたが
裸で密着するとどうしても勃起してしまうので体裁が悪い。
俺が勃起している事に楓さんが気付くと恥ずかしそうに顔を俯かせる。
あえて言葉にはしないが申し訳ない気持ちになってしまう。



「……大体外の方は全部見ましたね」

「はい……」

俺たちは肩を並べて途方に暮れていた。

外にいないとなると店の中やアトラクション内にいる可能性が高い。

それはつまり性的な行為を行っているという事である。

あずさの事だから下心を持った男に

無理矢理連れていかれた可能性も考えられる。

楓さんに言い寄って来た男たちのように、

あずさも色んな男たちに声を掛けられているに違いない。

胸中の不安は増す一方だ。

「……楓さん！
「わかりました」

店を一軒ずつ見ていきましょーう！」



「いらっしやいませえ！」

可愛らしい女の子が元氣よく出迎えてくれた。

柔らかな乳房がプルンと揺れる。

鼻息荒く乗り込んだものの

店内の性的な雰囲気^{いじやく}に気圧されてたちまち萎縮^{いじやく}してしまう。

変な所が膨張してしまわないように視線を逸らした。



「あ、あの…… 店内を見てみたいんですけど……」

「はい！ ご案内しますね。」

「こちらにリストバンドをかざしてください」

言われるままに俺と楓さんは

カードリーダーのような台にリストバンドをかざす。

ピッと音が鳴ったのを確認するとキャストの子は俺たちを奥へと誘導した。

店内は鞭のような物で叩く音や呻き声があちこちで鳴り響いていた。壁も無い見通しの良いプレイルームで男女がSMらしいプレイを行っている。どうやらSM系の店みたいだがプレイ内容が周りに筒抜けなのはオープンセックスを売りにしているセックスパークらしい作りだ。こんな所にあずさが連れ込まれていたらと考えると肝が冷えた。注意深く周囲を見渡す。



「いちらへどうぞ〜」

店内をザツと見るつもりだったのだが俺と楓さんはクッションだけで仕切られているプレイルームの一室に通された。

「攻めと受けの希望はございますか？」

「いやいや！」

俺たちは遊びに来たんじゃなくて店の中を見たかっただけで……！」

「SMって言うとなんか敷居が高いですよね。」

でもご安心ください！」

お客様みたいに興味はあるけど実際にやるのはちよつと……

という方のためにキャストがお手伝いしますから！」



「……私たちは本当に見るだけで良いんです。行きましよう」

「あ、ああ……」

楓さんが俺の手を取り引き返そうとしたが、キャストの子に回り込まれた。

「ごめんなさい！ 何か至らぬ点がございましたか？」
「至らぬ点も何も……」
「代金は頂きましたし、
何もしいままお帰しする訳にはいかないんですう！」
「リストバンドのあれか…… 良いよ、気にしないから」
「いえ！ そういう訳にはいきません！」
代金を頂いて何もしなかったなんて知られたら私が怒られてしまいます！」



女の子は大きな瞳に涙が浮かべて呼吸を震わせている。
こんな商売だから上の人間は怖い人物なのかもしれない。
いたたまれない気持ちになるが俺ひとりの問題じゃないしな……

「……SMってことはセックスしなくても良いんですよね」
「はい！ 本番行為も有りですがなくても全然オーケーです！
ハードなプレイからソフトなプレイまでございますよお」
女の子の顔から涙がはじけ飛んで笑顔が咲いた。
嘘泣きだったので顔をしかめてしまった。



「一番簡単で早く終わるプレイをしませんか？
その方が早く済みそうですし」

「え、ええ…… 楓さんが良いなら俺は構いませんが……」

「ありがとうございます！ 攻めと受けの希望はございますか？」

「俺が受けて良いですよ。 楓さんの体に傷を付ける訳にはいきませんし」

「すいません……」

「かと言って鞭の痕とか残るのはマズいから出来るだけ痛くない奴ね……」

「かしこまりました！」





「ふふふっ。もうビクビクしてますよお。よっぽど我慢してたんですねえ」

「……」

「いや、まあ……」

俺は大の字に寝転がって女の子と楓さんにペニスを踏まれていた。

ローションに濡れた小さなふたつの足が

俺の陰茎や龟头を程良い刺激で踏み付ける。

怖さも手伝って少し強めに踏まれると情けない声が漏れてしまう。



楓さんに格好付けていたポイントが
プラスから一気にマイナスになったのではないだろうか。
みっともなく穴があいたら入りたい気分だ。
穴と言えば……

スラリと伸びた太ももを上げると
膣口からヒタがめくり上がり、小さな穴が時折垣間見えた。
あの穴の中はどんな感触だろうとついつい想像してしまう。

「……痛くないですか？」
「は、はい…… 痛くないです……」
どちらかと言えば気持ち良い、と頭の中で呟く。

「やっぱり恥ずかしいですね……」
「気にする事はないですよ。」
「犬のウンチを踏んでるようなものだと思ってください」
「……」
俺のペニスは犬の糞と同じだそうだ。
いつの間にか言葉責めまで始まっていた。



「おチンチン踏まれて喜んでるなんて変態さんですねえ」

「変態なんかじゃないですよ……」

「そうですかあ？ おちんちんの先っちょから我慢汁が出てますよお」

「あ……」

龟头から溢れる我慢汁を見た楓さんは頬を赤らめてフォローを止める。
まことに遺憾である。



「お姉さんもこうしてみてください。
もっとお兄さんをいじめちゃいましょう」
「ええっと…… とう？」

「うっ……！」
ふたりは絡めた足の裏でペニスを挟んでゆっくりシゴいた。
楓さんはおぼつかない足取りだが
キャストの子は慣れているのか足とは思えないほど器用に指を操る。
手でシゴかれているような刺激に思わず声が出た。





「可愛い声が出ちゃってますよお」

「ふふっ」

「うう……」

完全に俺はふたりの玩具と化していた。

楓さんが可哀想な物を見るような目で見下ろして

薄く笑う表情に興奮を覚えたのは内緒だ。

せめて射精する所は見せたくなかったのだが

射精感がグツグツと高まっていくのは止めようがなかった。

に
ご
ち
が
な

に
ご
ち
が
な



「気持ち良かったですかあ？ お兄さん」

「あー、うん…… いーいーや！ すいません、楓さん……！」

「いーいーえ…… こちらこそ、すいません……！」

恥ずかしすぎて俺たちはしばらくお互いの顔を見れなかった。



「絵里ちゃん、おつかれさまー!」

「あら、凜もお疲れ様。その子は?」

「新人のあずさちゃんにや!」

「この子は絵里ちゃんって言うってこのバーテンやってるんだよ」

「初めまして、絵里です。よろしくね、あずさ」

「こちらこそよろしくおねがいますう……!」



壁ハマリコーナーで失神したあずさは凜と一緒に休憩を貰った。

まだ頭がぼやけている上に足腰が立たない状態なので

ひとりでは上手く歩けない。

キヤストもよく休憩に利用するというバーへ凜の肩を借りてやってきた。

今はひとまず何でも良いから飲み物が欲しい所だった。

「絵里ちゃん、アレちよーだい！ 元気になるやつ！」
「バンクラッシーね。いいわよ……」
「ありがとうございます……！」
「はい、あずさにも」



絵里があずさにバンクラッシーのグラスを渡す。
白い液体の中に緑色の葉のような物が入っている飲み物だった。
一見すると青汁の牛乳割りに見える。

喉がカラカラに乾いているあずさは躊躇する事なく口を付けた。
白い液体は飲むヨーグルトのようだったが
葉の匂いは強いし口内に絡み付いて飲みにくい。
普段なら好んで飲まない味だ。
しかし味など気にしていられないくらいあずさは喉が渴いていた。

「はあ、はあ…… ああ…… もう一杯いただけませんか……？」

「初めてで2杯目はちよつとねえ…… 他ににする？」

「いいじゃない、絵里ちゃん！ 初めてだからこそだよ！
いっぱい気持ち良くさせるにや〜！」

「もー、あずさの具合が悪くなったら凍が面倒みるのよ？」

「任せるにや〜！」



泫々と言った様子で絵里は2杯目のバンクラッシーをあずさに渡した。



「ありがとうございます……」
グラスを両手で持って半分程飲んだ頃、あずさは体調の異変に気が付いた。

「そう言えばアナウンスをされていた女性のお客様も
あずさと同じ名前だったわ」

「珍しい名前じゃないもんね」

凜も今日凜と同じ名前の子を見かけたよ」



「まあ……今日はそういう目なのかしら」
「それってどういう目？」

時間の流れが急に遅くなったような不思議な感覚だった。凜や絵里が動くときと動く前と動いた後の像がハッキリ見える。声が水中で聞いているようにくぐもって聞こえた。話している内容はおぼろげで、頭に入るように入らない。



グラスを持ったまま固まっているあずさを絵里が心配そうに見る。

「トリップしちゃってるみたいね」

「ソファで休むにやー！ あずさちゃん、行こ！」




凜は固まっているあずさからグラスをゆっくり取り上げてカウンターに置くとソファの方へ手を引いて行った。





「お薬も塗ってあげるにゃ〜」
「あっ……はぁ……」

痛み止めを付けた凜の指が
あずさの膣口に触れる。
指が触れるだけで
ソクソクする気持ち良さが
沸き上がった。
敏感な所だからという
理由だけではなさそうだ。
凜の触れている箇所は
どこも気持ち良い。
肌と肌が擦れると
くすぐったさにも似た快感が
ソクソク浮き立った。っていく。



凛の指が優しくあずさの膣内を撫でる。
入り口の方を撫でていただけなのに膣内全体を愛撫されているようだ。
快感が子宮に響き、子宮から全身に温かい快感がシワシワ広がっていく。

「気持ち良い？ あずさちゃん」

「はい……」

「きもち…… いいです……」

「壁ハマリのところで」

「あずさちゃん」生懸命

「お仕事してたでしろう？」

「凛は嬉しかったにゃ」

「はい……」

「大変な仕事だけど」


「一緒に頑張ろうね！」

「あずさちゃん！」

「はい……」

「おしと……」

「がんばります……」



あずさの体は眠りに落ちる寸前のような
心安らぐ心地良さとオーガズムのような激しい快樂が共存していた。
頭がぼーっとして思考が働かない。
脳裏に浮かぶのは「触れられると気持ちが良い」、ただそれだけだった。
快樂の海に浸っている所に男の音が水を差した。

「ね、お姉ちゃん、挿入れていいかな」
「だめにゃ。濃だち今休憩中なの。こめんね」
「ちよつとだけで良いからさ！ ね！ 先っぽだけ！」
「だめにゃ。お外に何げば、いっぱい女の子いるよ？」
「そこのお姉ちゃんが良いんだよ。
ちよっタイプ！ ね！ すぐ終わるから！」
「もー、しつこいじゃあ」



「いいですよお……」
「え！ 本当に？ ありがたう」
「無理しなくていいんだよ、あずさちゃん。休憩中なんだから」
「だいじょうぶですわ……」

言葉が頭の中をグルグル回って
ふたりが話している内容は
よく分からないが
凜が困っている事は
何となく分かった。
目の前の男と
セックスすれば良いらしい。
あずさは微笑んで
男のペニスを受け入れた。

ゴツゴツしたペニスの心地良い感触が腰全体に淡く広がって行く。
実物の大きさ以上に大きく感じた。



男が激しく腰を突くと、膣奥に陰茎を挿入される快感と膣口まで陰茎を引き抜かれる快感を同時に感じた。快楽の波が膣から子宮、子宮から脳へ波紋のように広がって行く。漣に体をまさぐられながらするセックスは、今までの人生の中でも最高に気持ちが良いものだった。



凜の体と男の体があずさの体に溶けて行く。
体を求められ、貪られるのは体感的にも感覚的にも幸せだった。
一瞬のような永遠のようなセックスは男の射精で幕を閉じた。





男の陰茎が膣口でピクピク脈打つ。
膣内が精液で満たされると子宮が
キュンキュン震えたような気がした。
射精された瞬間は気持ち良かったが
出来ることならずっとセックスしてい
たい。
思考の働かないあずさはそう感じた。



「……」

あずさと楓さんの彼氏の搜索は難航していた。さっきの二の舞にならないよう店に入る時は見学だけと説明して回り、至る所で楓さんに纏わり付く男を追っ払った。中にはいきなり楓さんをレイプしようとペニスを尻に押し付けてくる変態もいた。突き飛ばすと笑いながら逃げて行ったが、ああいうのがその辺にいるかと思うと恐ろしい。



行き違いになってる可能性も考えられるが、ひよっとしたらあずさはパークから出たのではないかとも考えた。こんなに猛獣どもがいるのだからありえなくはない。俺を探さずに帰ったのだとしたら寂しく思うが、女性客に対する惨状を知った今となってはその方が有り難い。

「……スワッピングランド、
入場可能なのはカップルコースの人だけって書いてあります」
「男性のみの入場禁止、女性客はおひとりでも可、か……」
「プリクラみたいだな……」 一応、見ておきましょうか……」
「そうですね……」

あずさはリストバンドを持っていないから入れないと思うが
男に無理矢理連れ込まれた可能性も否定できない。
俺と楓さんはカップルとしてスワッピングランドへ入場した。





男と女の子がセックスして女の子ふたりが
男の脇を固めて体をすり寄せている。
開け放たれた部屋の中にいるのは俺たちを除いてこの4人だけだ。
カップルコースの人は少ないのだろう。



一般客らしいのに女の子は3人とも美人だった。
ハーレムを作っている男を羨ましき半分、呆れ半分で眺める。
俺もいつそ思いつ切りハメを外してやろうか。
搜索に疲れてしばし自暴自棄な考えを巡らせていたが、
隣にいる楓さんの様子がおかしい事に気づき我に返る。





「楓さん、どうしました？」

「……ッ」

楓さんは大きく目を開いて男の方を見つめている。
変態が楓さんの尻にペニスを擦り付けてきた時も
ここまで動揺はしていなかった。
ひよっとしたらあの男は楓さんの彼氏なのかもしれない。

俺が声を掛ける前に楓さんは小走りで出口へ駆けて行った。
とりあえず追うしかない。





「どうしたんですか！ 楓さん！」

「……」

楓さんの手首を掴むとようやく走るのを止めてくれた。

「……さっきの男が楓さんの彼氏なんですか？」

「……」

「一言文句言ってやらなきゃ気が済みません！
俺も一緒に行きますから楓さんも行きましょー！」

「……良いんです。」

私の彼氏なんて最初からここにはいなかったんです……」

「そんな！ 彼氏のせいで楓さんが何度も危ない目に遭^あってるのに！」

「良いんです。少し疲れちゃいました……」

もう帰ります。奥さんを探すの手伝うって言ったのに…… ごめんなさい」

「……」



怒り狂ってもおかしくない状況で

悄然^{しぜん}としている楓さんを放^{はな}っておくなんて出来なかった。





その店はわんにゃんランドという可愛らしい名称をしているが
店内の動物は大型犬ばかりだった。
性的な意味で動物たちと交わる行為を好む愛好家たちや
そのプレイを見て楽しむ層に人気のスポットらしい。
怪我をさせないように調整したり
性病にならないように調整したりしていると
凜から説明があったがあずさはもう覚えていない。

最初は微かに抵抗していたが
思いのほか犬とセックスするのが気持ち良かったので
次第に何も考えなくなっていた。
今では自分は雌犬なんだと錯覚して
雄犬との子作りセックスに励んでいる。





あずさは心の中で相手の犬の名前を「らぶたん」と名付けた。
自分は「あずたん」だ。

らぶたんにあずたんはラブラブの新婚夫婦だった。
2匹の犬はお互いを求め合って結合している。
子作りの真っ最中である。



らぶたんの陰茎の根元がぶつくら膨れ上がり
あずたんの膣からペニスが抜けないように固定されている。
細長いペニスがあずたんの子宮口を
くすぐるとあずたんは嬉しそうに鳴いた。
子宮口にコチヨコチヨ当たる感触がそのまま脳を優しく掻き回すのだ。
らぶたんもあずたんも動物らしく
よだれをまき散らし、
恥も外聞もなく必死に新しい生命を作ろうとしていた。



「これは良い雌犬ですね」
「めちやくちや気持ち良さそう」
「この子とやりたいんだぜ」
「射精が終わるまでお待ちください。
無理に抜くとおチンチンが傷付いちゃいますので」
周囲の人間が何か言っているが
子作りを邪魔する気配はないのであずたんは安心した。
愛しい夫のペニスを思う存分堪能する。



らぶたんがあずたんの子宮に向けて子種を放出した。
子宮の中に注がれる精液の感覚が狂おしいほど心地良い。
あずたんは元気な仔犬が産まれる事を祈った。






「ハハハ！
本当に好きもんだな！
この雌犬！」

夫の射精が終わると人間の雄が
らぶたんを押しつけて
あずたんの膣にペニスを挿入した。
自分たちは犬なのだから
人間の好きにされるのは

仕方がないとして夫を
放置するのは忍びなかった。

夫のペニスを
綺麗にしてあげようと
ペロペロ舐める。



交尾の快樂の中では
強い獸臭も氣にならない。
あずたんは間男との交尾を
楽しみつつ夫に奉仕し続けた。

夫との交尾、そして間男との交尾で
オーガズムを感じっぱなしの
あずたんの膣は生き物のようになうねっていた。
ペニスにまとわり絡み付き、
精液を搾り取ろうとしている。
人間の雄は堪らず呻き声をあげる。



「良い雌マニコだ。」

「……………こっちも楽しんでませてやる」

「そう言くと人間の雄は
あずたんのしっぽに手を掛けた。」

あずたんのアナルからしっぽが
ズルズル引き出される。
初めての快感に
あずたんは身を震わせた。
脊髄にビリビリと
電気が走り頭の中が真っ白になった。





人間の雄は面白そうにあずたんのしっぽを抜いては入れた。膣のペニスとアナルのしっぽ、両方の感覚が混ざり合って快楽の衝撃が下半身から上半身へ押し寄せてくる。あずたんは気持ち良すぎて意識が飛びそうだった。

「おほっ！ マンコがキュウキュウ締め付いてくんない！ 膣越しにアナルレシタガゴリゴリ当たるの良いいし、こりゃ良いわ」

あずたん♡

ほっ♡

ズッ♡

ズッ♡

ズッ♡



「おらー！ 噂の睡天！」

アナルのしっぽを出し入れしながら人間の雄が交尾してくる。膣と直腸から内臓がヒリ出されそうだったが快感の方が恐怖を上回った。



人間の雄があずたんの膣内で射精した。
精液を子宮に取り込むべく
膣が何度も大きくうねる。
射精される快感の中、
あずたんの意識は途切れた。

「ぐろー！ぐろー！」



「サービスドリンクです」

「ありがとうございます……」

北欧系の美人から葉らしき物体の入った白い飲み物を渡される。俺と楓さんは揃ってグラスを口に運んだ。

……非常にマズい。

しかし、口にした物は全部食するという信念に従って最後の一滴まで飲み干した。

楓さんもグラスを空にしたようだ。

「とりあえずビールちょうだい。」

「……私もビールで」

「かしこまりました」

パーテンの子も美人で白い肌が眩しい。

張りのある乳房が揺れるとそそられたが

勃起するのは体裁が悪いので柵の酒を眺めて待つ。

どう切り出して良いか迷っている内にビールが運ばれた。

ビールに口を付けた所で楓さんの方から話し掛けてきてくれた。

楓さんは？」



「……奥さんを探しに行かなくていいんですか？」

「これだけ探してもいないんだから、きっと帰っちゃったんですよ。だからもう良いんです」

「酷いですね……」

「あなたがあんなに必死になって探していたのに……」

「あ、すいません。奥さんのこと悪く言って……」

「いえ…… 楓さんみたいに探してくれた方が嬉しいけど

帰ってるなら安心です。ここは飢えた獣みたいなのぼっかだから」



「ふふっ。でもあなたは違いますよね。」

「……私もあなたみたいになんとか好きになった」

ポツリと言った言葉にどう反応して良いか分からない。
ともすれば抱き締めてしまおうかもしれないからだ。

楓さんに触れたら最後。

肉欲にかまけてセックスしたがるに決まっている。

楓さんの白い肌、形の良い乳房、

スラリと伸びた手足、整った顔に柔らかそうな唇……

楓さんの言葉にどう反応して良いか分からない。

抱き締めてしまいたい衝動に駆られる。

楓さんに触れたい。

肉欲にかまけてセックスしたい。

楓さんの白い肌、形の良い乳房、

スラリと伸びた手足、整った顔に柔らかそうな唇……

ふと、俺は異変に気付いた。
思考が妙だ。

俺は異変に気付いた。
思考が変だ。

思考が変だ。

めまぐるしく頭が回らない。
めまぐるしく頭が回らない。

めまぐるしく頭が回らない。
めまぐるしく頭が回らない。

「おつまみにどうぞ。パイアグラもサービスです」
「日本酒お願ひします」
「承りました」



いつの間にか目の前に乾き物が入った器と
白い錠剤のような物が入った器が置かれていた。
パーテンの子を見ると残像を残して動いているように見えた。
コマ送りで動画を見ているような不思議な感覚だった。



「裸、見すぎです」
楓さんが何か言って俺の腰に触れると
イスごと俺の向きを自分のサマに向けろ
楓さんの手が触れている部分がジワジワと気持ち良い……





「見るならこっち」
妖艶な笑みを浮かべている楓さんは
さつきとは別人のようだった。
足を開き、大事な部分を
両手で広げて見せている。
ピンク色の性器がヌラヌラ濡れていた。
楓さんのアソコに呼応するかのように
ムクムクとペニスが反り返っていく。



「ふふっ大きくなった」
俺の勃起したペニスを見て嬉しそうに
楓さんが笑った。
楓さんが俺とセックスをかんことを
望んでいるような気がして下腹部を熱くなった。
気を紛らわそうと
カウンターの錠剤に手を伸ばす。

フリスタのような物を想像していたそれは苦かった。
吐き出す訳にはいかなかった。
「そんな物飲んでどうするつもりですか？」



温かくて気持ち良い快感が後頭から腰全体に掛けて広がっていく。
いつの間にか楓さんが俺のペニスを握っていた。



「私は良いですよ。
あなたがしたいなら……」
柔らかくて細い指が
ゆっくり陰茎を撫でている。
くすぐったいような痺れにも似た快感が
次第に高まって熱くなっていった。
頭の中で楓さんの言葉がグルグル回る。
俺だって楓さんと
セックスしたいに決まっている。
しかし俺にはあずさが……

ス
!!

ス
!!



思考が早送りのように流れては消え、流れては消える。
考えがまとまらず、言葉にならないからだ。



「今日だけ私をあなたの奥さんにして。
……ね？」
楓さんの指は亀頭まで伸びていた。
クリクリと亀頭の先を弄んでいる。
亀頭に感じる熱い痺れが
じんわりと全身にふわふわ広がっていた。
ポーッとした頭で
楓さんの火照った顔を見つめる。
熱を帯びている
左右の異なる色をした瞳が
見つめ返してくる。

スィ
スィ



「こちらへどうぞ」
バーテンの女の手に連れられて
俺たちはソファへ向かった。





ソファベッドに倒れ込むと同時に楓さんの中へ挿入した。
しっとり濡れている膣は抵抗なく陰茎の根本まで啜え込む。
龟头から脊髄を通して頭に電流が走った。

楓さんの体は柔らかくて温かみ、そして気持ち良かった。

肌が触れるだけで粘膜を擦り合うような気持ち良さを感じる。

間近で嗅ぐ楓さんの髪はとても甘美な匂いで、

嗅ぐたびにペニスが硬くなっていくような気がした。



細い肩を抱き締めて胸と腹を密着させる。

楓さんも手を背中に、足を腰に絡ませて俺を抱き締め返してくれた。全身に走るジワジワしたくすぐったさにも似た痺れは俺と楓さんが溶け合っているのではないかと錯覚させた。俺たちは今、完全にひとつになっている。

楓さんの甘く切なくて色っぽいあえ声は聞いているのは楽しかった。さっきまでの大人の女性らしい落ち着き払っていた声色とは全く違う。セックスの時だけ聞かせてくれる耽美で卑猥な声だ。がむしゃらに腰を振りたい気持ちもあったが、

楓さんの可愛い声をもっと聞きたくて声の出るポイントを探す。



陰茎を膣に深く挿入された状態から膣口まで
龟头をゆつくり引き抜くと切なく、寂しそうな声が漏れる。
膣口から膣奥まで一気に龟头を滑らせると甘く、嬉しそうな声が弾んだ。
いくらでも楓さんの甘い声を楽しみたかったが、
ねっとり絡み付いて締め上げてくる膣の中を
何度も往復するのは龟头が耐えられそうもない。
膣の一番奥深くでわずかに硬い感触が龟头に伝わった。
子宮口らしき硬い部分を龟头の先でコツコツ突く。
声と腰を震わせて楓さんが呻いた。



陰茎の根元を膣口にピッタリ密着した状態で
グリグリ腰を回すと楓さんの声と腰は一層震えが増した。
これならもう少し射精を遅くさせられそうだ。
子宮口を亀頭でノックし続ける。
楓さんの腰はビクビク痙攣するようになっていった。



膣の中まで痙攣しているのか、

まるで膣が動いてペニスをシムカのようになりねりを見せた。


ペニスに膣が絡み付いて子宮が精液を搾り取ろうと吸い上げているようだ。

子宮の吸引力に負けて、俺は楓さんの中で大量の精液を吐き出した。



俺自身が楓さんの子宮の中に吸い込まれたような虚脱感を感じる。
あれだけ射精したのにペニスはまた勃起していた。
しかし、今はまだ楓さんの温もりを感じたい。
勃起しているペニスを楓さんの中に挿入れたまま俺は楓さんを抱き締めた。





抱き締めたまま動かない俺にしびれを切らしたのか、楓さんは俺の上になり主導権を取った。柔らかい唇を押し付けて、舌を絡ませてくる。楓さんの舌は甘い味がした。

俺の舌を吸いながら楓さんは腰を振った。精液でグチヨグチヨになった膣がペニスを飲み込む。心地良い快楽の中で、柔らかいソファベッドに身を沈め、温かい楓さんの体に挟まれるのは至福だった。仰向けになり、動くのを止めたおかげか、少し冷静さを取り戻す事が出来た気がする。



「すいません……」

「思わず中に出しちゃいました」

「良いですよ。」

「今はあなたの奥さんなんですから」

「……そう言われると、」

「何度でも中出ししたくなっちゃういますね」

「ふふっ。」

「妊娠するくらい」

「出しても良いですよ」

「愛しさが込み上げてくる。」

「ギュッと抱き締めると」

「楓さんは嬉しそうな声を上げた。」



「飲み物に何か変なもの
入ってましたよね。」
「……何て言うか
説明しづらいんですけど」
「ええ、今もちよっと
クラクラします。」
「でも気持ち良い……」
楓さんが身をよじり
乳房とお腹を擦り付けてきた。
ジンワリ痺れる感覚が
肌に浮き立つ。



「いっばいしまししょう……
今日だけは……」
「今だけは私を愛して……」
「俺と楓さんは時間を忘れて
快楽の海へと沈んでいった——」



あずさはふわふわした足取りでソファに腰掛けている男へ近付いて行った。周りが思い思いの相手とセックスしている中でポツンと座っている男は夢うつつのあずさから見ても浮いて見える。



「どうしましたあずさ、体調不良ですか？」


「あ…… はあ……」

初めてここに来たんですが…… 女の子に声掛けづらくて……」

「だめですよあずさ？ したいならさっさと行って言わなくちゃい」

あずさは勃起している男のペニスを下から上に優しく撫でた。男が微かに呻き声を上げる。





鋼のように硬いペニスがあずさの膣内に収まった。
粘膜同士を擦り、擦られ、あずさと男は同時にあえぎ声を上げる。
筋肉質な男の体に豊満なあずさの体がピッタリと覆い被さった。

快感と共に愛おしさが込み上げてきたあずさは男に熱いキスをする。
舌と舌が触れ合い、擦り付け合うと頭が白くなるくらい気持ち良かった。
男の口内から溢れる唾液をコクコク飲む。



今や全身が性感帯になっているあずさは
抱擁^{ほうよう}とキスだけで軽いオーガズムに達してしまっ
た。
しかしまだまだ序の口だ。
もっとセックスを楽しませてくれる事を男の硬いペニスが物語っている。
深く腰を下ろすとあずさの大好きなペニスが一番奥まで当たった。
子宮口に男の龟头がコリコリ当たっている。
龟头が擦れると子宮は精子をおねだりするようにキュンキュン収縮した。

男は堪らずあずさの尻を持ち上げて自分の腰に叩き付けた。
体の芯まで貫かれる快感にあずさは歓喜の悲鳴を上げる。
何度も何度も膣を食られる感覚は気持ち良すぎて意識が飛びそうだった。
子宮に射精されるといふ最大の快楽を味わうためにあずさは耐えた。



子宮は精液を飲み込む準備が万端になっていた。
膣内は陰茎にまとわり付き、子宮口は龟头を吸い上げている。
男の全てを飲み干すように舌を吸い、唾液を吸った。



「イッ！ーんあまみすよ！」

男の合図にあずさは胸を躍らせた。
精液の感触を楽しむために意識を体内に集中させる。





男はあずさの奥深くで射精した。
子宮が美味しそうに精液を飲み込んでいるのを体感的に感じた。
膣口でピクピク脈打つ陰茎が可愛い。
敏感になっている膣内からは精液の熱も感じ取れた。



「最高でした……」

「私も……」

射精したのを名残惜しそうにあずさは唇を合わせた。





閉園時間になる頃、あずさはようやく正気を取り戻した。全身が気だるく、喉が渴いてしようがない。アソコがヒリヒリして下腹部に鈍い痛みがズキズキ走る。ひとりでは歩けないくらい消耗していた。

「あずさちゃんお疲れ様！ 後半頑張ってたねえ。パンク効いてた？」
「さ、寒い……です……」
パーク内は外も暖房が効いているため
気温が低い訳ではないのだがあずさの手足はガタガタ震えていた。



「だいぶトリップしてたからねえ。暖かくしてればその内治るにゃ！ 喉も乾いてるでしょ？」
ちよつと待ってね！」

「パンクの後って普通の水が何故かすっごく甘く感じるよねえ」
「……」

少しずつ記憶が鮮明に蘇ってきた。
求められるまま男を受け入れ、犬とまで……
最後の方では自ら進んでセックスして中出しされた……
妊娠の不安より何よりひとつの強迫観念が胸にどす黒くこびり付いていた。

「あずさちゃんはどここの部屋？ 送ってあげるよ！」



あずさは夫を運命の人だと信じていた。
今も思っている。

しかし、だからこそ夫と会うのは^{はげ}憚られた。
汚れてしまった自分は夫の運命の人として、相応しくない。



「あずさちゃんはどこに帰るにゃ〜？」
「か……」



「帰る場所は……ありません……!」

「ありやうや、よしよしにやう。大丈夫だよ、あずさちゃん。」

「今日は凍たちの部屋に行こう! いいよね、かよちゃん?」

「もちろんだよ。よろしくね、あずさちゃん!」

夫の元へは帰れない。
あずさは絶望しながら決意を固めた。

家にあずさが帰ってくることはなかった。

あんな場所に連れて行った事を怒って家を出たのならまだ分かる。しかし実家の方にも音信不通で行方不明なのは異常だ。

そもそもあずさの荷物は手付かずだったからセックスパークから出ていないはずだった。

もちろんセックスパークにも問い合わせたが

そんな女性は知りませんの一点張りでラチが開かず、荷物があるんだから外に出る訳がないと言っても、

受け付けで服を買い取るからそれで帰ったんでしようとのらりくらり^{かた}隠された。

後目、あずさのクレジットカードの明細を見たら

確かに服の料金が引かれていた。

だがそんなものはパーク側がいくらでも操作出来る。

パークが怪しいと睨んだ俺は受付の方まで乗り込んだがまともに取り合ってもらえず、

終いには営業妨害で訴えると脅されてしまった。

騒ぎを起こしたせいでセックスパークへは

出入り禁止されるといふ散々な結果だった。

警察に捜索届けを出したが音沙汰はない。

誘拐されたのではないかと不安に悩まされるが

俺にはもうどうしようもなかった。

今はただ、あずさが無事に生きている事を祈るばかりである。

「ただいま」

「おかえりなさい。」

「ご飯にする？ お風呂にする？ それとも、た、わ、し？」

楓はタワシを持つ手と一緒に首を振って悪戯っぽい笑顔を浮かべた。

私とタワシを掛けているのだろう。


楓の親父ギャグにももう慣れた。

「じゃあ、タワシで」

「え……？ こう…… ヨシヨシ？」

宙でタワシを掻いている楓の頭に

軽くチヨップをかますと楓はフフツと笑って食事の用意に取り掛かった。



あずさが見つかるまで俺と一緒に居たいと言う
楓と暮らし始めてどれくらい経つか……
あずさとの結婚指輪をそつと撫でる。
このままではどの道、苦しい選択を迫られるだろう。
それでも俺はあずさに一目会いたかった。

携帯を確認すると着信5件、メール1件の通知が来ていた。
職場からだったら嫌だなと思いつつ差出人を見る。

あずさの親友の友美さんからだった。

留守電はないのでまずメールを確認する。
『あずさかもしれない。セックスパークのHPでキャスト一覧を見て。』
とあった。

焦燥感に駆り立てられ、急いでパソコンの電源を付ける。
慌てた様子の俺を見て楓は訝しげにこっちへ来た。



「どうしたの？」

「あずさが見つかったかもしれない」

「……」

複雑な表情で楓が俺の横に立つ。

もどかしい思いでパソコンが立ちあがるのを待った。

起動したらすぐさまネットを開いてセックスパークのホームページへ飛ぶ。

キャスト一覧……

顔出しオーケーなキャストはここに登録されて指名を受ける事が出来るそうだ。指名出来るのはプレミアムコースを申し込んだ人で一日中一緒にいたり様々なプレイが可能だとか。

数十名のキャストの名前と裸の写真が表示される。

一覧の中には穂乃果ちゃんの顔もあった。

懐かしさを感じている暇はない。

楓の手前、出来るだけ女の子の顔と名前以外を見ないように画面をスクロールする。

……俺はある所で指が止まった。







「写真と似ているけど……あずささんなの？名前も一緒……」
楓の問いに俺は震えた声で答えた。



「あずさ……？」
そこに映っていたのは紛れもなく俺の妻、あずさの姿だった。
清楚だった妻からは考えられないあつれ穢も無い格好で局部を晒し、
酩酊めいじやうしているかのようなだらし無い表情を
顔に貼り付けているが夫の俺が見間違うはずはない。
心臓がバクバク高鳴り、指が震えた。

「ああ……！間違いない……！」
怒りが沸々と湧いてきた。
やっぱりパークが隠していたんだ。
拳を握り締めてあずさの痴態が写っている画像を睨む。



薬でも打たれているのだろうか。
今まで見た事もない呆けた顔、
淫らな格好をしている妻をディスプレイ越しに見て涙がにじみ出る。
俺の妻をこんな風にしやがって……！





俺は楓と一緒にセックスパークへ向かった。

TO BE CONTINUED



「今から行ってくる……!」
「……私も一緒に行くわ。いいでしょ?」
「……」一緒に探してくれるって約束だったもんな」
「うん……」